

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00133

研究課題名（和文）創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法

研究課題名（英文）the principle of melody suitable for the transmission of the lyrics of Noh music in the formative period

研究代表者

丹羽 幸江 (Niwa, Yukie)

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：60466969

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：能楽が14世紀後半に歴史上初の本格的な劇場芸能として成立した際に、物語を音楽によって効果的に伝えるための工夫は何であったかとの問いのもと、先行芸能早歌や仏教声明の講式との比較から旋律の特徴を明らかにした。世阿弥の自筆譜の解読を行うとともに、その旋律を詩型との関わりから明らかにした。謡の旋律は、詞章の七五調の詩型と明確な運動性をもつ。1句の上ノ句と下ノ句の旋律の動き方には一定のパターンが一貫してみられ、これは日本語の自然な抑揚を反映したものと考えられる。能の旋律パターンは、歌謡としての多様な旋律パターンをもつ早歌から、基本となる伝達性の高い旋律パターンを取捨選択的に摂取したと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで謡の旋律は音階や音どうしの連結の規則といった音楽面のみが研究されてきた。本研究では語り物音楽としての側面を重視し、七五調の詩型をもつ歌詞との連関から旋律の原則を探るというこれまでになかった視点を提示した。日本語の歌詞を音楽としてどう処理するのかは声楽中心の日本音楽において無視できない問題である。このため対象を謡だけでなく近世邦楽にも広げ、俯瞰的な位置から旋律を詩型との関わりをも示した。本研究の成果は音楽教育の場において近年始まった伝統音楽の歌唱の指導において利用することができるだけでなく、歌唱のシステムをわかりやすく理解するためのガイドとして実際に役立てられ始めている。

研究成果の概要（英文）：Noh was established in the late 14th century as the first full-scale theatrical performing art in Japanese history. What new ingenuity did Noh songs have to convey the story effectively? In addition to decoding the manuscript of Zeami, from the comparison with the previous performing arts, Soga and Koshiki, the melody of the Noh chant was revealed from the relationship with the poetic style. The melody of the chant has a clear linkage with the poem style of Shichigo-no-hiki (seven-five-syllable poem) of the chapter of the poem. This is considered to reflect the natural intonation of Japanese. It is considered that the melody pattern of Noh was taken by selecting the basic melody pattern with high transmission from Soga.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽学 日本音楽史 能楽 中世芸能 世阿弥 記譜法 早歌 伝統音楽の歌唱

## 1. 研究開始当初の背景

14世紀後半に成立した能楽は、日本の歴史において初めての本格的な劇場芸能である。それまでの平家や声明の講式といった座敷や寺院などで行われていた語り物音楽は、声や楽器などの音声のみによるものであったが、能では、役者が登場人物を演じて物語を視覚化、立体化する劇場作品となった。耳で聞くだけの物語から、動く絵巻物と呼ばれる耳と目で享受する物語への変化は、同時に、それまでサロンの狭いコミュニティ内での語りの場を、多数の観客のいる屋外の劇場へとひろげた。

語り物音楽は旋律をつけた「語り」によって物語を伝達するものであるが、能の創生期の音楽には、演技を裏付けし、語りの行われる空間の変化を支えるだけの、それ以前の語り物音楽とは一線を画すような大きな飛躍があったはずである。語りの場の拡大を可能にしたのは、聴取が散漫になりがちな屋外の場においても物語の意味内容を的確に伝えうるような、語りを直接的になう音楽の変化が伴っていたはずである。

このような語り物音楽の芸能の変化を音楽面で推進した要因は、何だったか。それは単に、講式の導師や琵琶法師といった単独の人物の語りや、能での地謡という合唱隊によって音量を増大させたことだけでは、説明をすませることはできない。創生期における能の音楽には、演技を裏付けし、語りの行われる空間の変質を支えるだけの、それ以前の語り物音楽とは一線を画すような大きな飛躍があったはずである。

能において初めて、語句や七五調のセンテンスに即した旋律が積極的に採用され、それが劇場という開かれた場での上演を容易にしたのではないか。すなわち、能という劇場芸能が日本において初めて完成したことは、文章の高い伝達性を持つ音楽の考案が不可分であったというのが本研究の出発点となっている。つまり、創生期の能の音楽においては、歌詞をよりの確に多数の観客に伝える手法を確立し、新しい語り空間を開いたと予測した。能の音楽の成立を問うことは、いわば、あたらしい語りの空間を歓迎した社会や人々の嗜好の変化を探ることと同義である。それをもたらしした要因を音楽面から探る。

## 2. 研究の目的

本研究は物語を伝えるための歌詞と旋律の関係について、能の音楽の創生期にさかのぼって考察する。能の音楽である謡は物語を旋律に乗せて語るものであるため、歌詞の伝達性を第一とする。したがって旋律はかならず歌詞との関係性のもとにとらえられなくてはならない。しかしこれまで能の謡は、音階や音の動き方の規則性など音楽面に限った研究が多くなされてきたものの、歌詞との関係性から旋律を扱う研究はまだほとんどなかった。

能楽を大成した世阿弥の自筆譜やその周辺人物の楽譜をもとに、仏教音楽の講式や早歌などの先行芸能との比較から、それまでの語り物音楽ではなかった、日本語の語句の発音や、文章の自然な抑揚に即した旋律法が確立し、七五調の文章を効果的にリズムに乗せる方法が促進したことを明らかにし、具体的にその手法を提示する。

## 3. 研究の方法

本研究では、能の大成者である世阿弥やその周辺の人物である金春禅竹などにより遺された楽譜を中心的な資料として、日本語の詞章を的確に伝達するための旋律法を抽出し、どういった体系をもつ音楽であるかを明らかにした。おもに先行芸能である早歌譜と比較を行い、新しい作曲法が確立した過程を実証した。

まず、世阿弥の自筆譜の解読を行った。世阿弥自筆譜は現在まで部分的にしか解読されておらず、具体的な様相がほとんどわかっていない。これまでの解読が、現在の謡本の楽譜記号との比較により行われてきたためと考えられる。新しく能の楽譜を考案しなくてはならなかった世阿弥は、先行する芸能の楽譜を参照したはずである。本研究では仏教音楽の講式や早歌といった楽譜との比較から解読を行った。これによって同時に、どのような芸能を参照し、何を摂取したかも明らかになると考えた。

次に詞章との関係での旋律法を明らかにした。これまで音楽学での能やその周辺芸能の旋律の研究は多くの蓄積がある。とくに旋律法に関する研究は、これまで廃絶した早歌に関する蒲生美津子氏の研究のほか、横道萬里雄氏による現行の能の旋律法に関する研究がある。しかしこれらの研究は、上行・下行旋律やフレーズングといった音の動きのみに着目したものであり、歌詞との関連は考慮されていなかった。謡の文章は七五調で記されている。こうした詩型と旋律との連動性について研究する必要がある。先学の研究をもとに、歌詞との関係性を考えて行くことで、世阿弥時代の能が、歌詞の表現としての新しい旋律法を考案したことが明らかになると考える。

能では、七五調の文章の抑揚に自然に沿うとともに、日本語の発音に叶った旋律パターンが開発され、そのことより格段に伝達力が高まったという仮説を、具体的に楽譜から立証した。

## 4. 研究成果

研究はおもに楽譜面からの解明((1)~(2)(4))と、じっさいの鳴り響きでの旋律の動

き方((3)~(4))という観点での解明を行った。

#### (1) 世阿弥の自筆譜への早歌のリズム記号の摂取

まずは最も早い時期の能楽の楽譜である世阿弥の自筆譜の解読へのアプローチを行った。能楽を大成した世阿弥は、これまでになかった謡という新しい音楽を記すための楽譜を考案しなくてはならなかった。その際に参照されたのはどの先行芸能の楽譜であったのかを問うことは、具体的な音楽的な継承関係を明らかにすることでもある。

能は多人数でリズムに合わせて合唱を行う音楽であるため、1人で演唱される仏教声楽の講式に比べてもリズム面での規則が厳密である。このため先行芸能のうち、やはり多人数合唱を行う早歌の楽譜との比較を行った。すでに横道萬里雄により、リズム面に関しては早歌と共通する八拍子というシステムを採用していることが明らかにされている。ではリズムを記譜する手法はどうであろうか。

世阿弥の自筆譜は現在の完備した楽譜とは大きく異なった外観を持ち、カタカナ書きの詞章の横に記号を所々付すというものである。現在の謡の記譜法とは明らかに異なる形状の記号が散見するとともに、同じ形状の記号であっても現在とは明らかに意味の異なる指示をしていたとみられる記号が多い。このため世阿弥の自筆譜は現在もまだ断片的にしか解読されていない。まずは世阿弥の一代後あたり、より完備した記譜法を持つと予測される能役者金春禅竹の自筆譜から世阿弥自筆譜への足がかりを得ようと考えた。

早歌でのリズム表記は、1周期8拍のうち奇数拍に朱点を打つことでリズムの枠組みを示すとともに、「振り」という特殊な音符によりモチという奇数拍での文字を延ばして歌う箇所を示すという丁寧かつ網羅的な記譜法が採られる。禅竹自筆譜では、早歌譜のようにわかりやすく奇数拍に朱点を打つことはないものの、「振り」によって八拍子を1周期とするリズムの枠組みを示しており、早歌譜から記譜法の一部を継承したのである。さらにこの結果をもとに世阿弥自筆譜にさかのぼると、「振り」の記号が付されるべき箇所には「フル」というカタカナ書きの文字譜が使用されており、早歌譜特有の乙に似た形状の記号を言語化して摂取したことが予測できるようになった。

このように具体的に早歌の影響を指摘し得た。世阿弥、禅竹の両者は、早歌のリズム記号のうち、「振り」のみを摂取しており、必要な記号のみを取り入れるという取捨選択を行っていることもまた明らかになった。これまで謡の楽譜は仏教声明のうち講式と早歌の影響が予想されてきたが、講式譜に関してはリズムの影響は特段みられず、早歌のリズム記号と同じ機能を持つ記号が用いられていることが明らかになった。

学会発表：「金春禅竹の記譜法」東洋音楽学会第69回大会、2018年。

雑誌論文：「世阿弥・禅竹自筆譜への早歌譜の影響——リズム記号「振り」の摂取」昭和音楽大学研究紀要38号、pp. 76-87。

#### (2) 世阿弥自筆譜への早歌の旋律面の摂取

世阿弥自筆譜への旋律記号に関して早歌譜の影響を検討した。能の楽譜は「胡麻」という一種の音符によって音節を記すが、なかでも世阿弥の自筆譜では早歌の「徴」という特定の音位を表す特殊な形状の胡麻を摂取していたと指摘した。

また、世阿弥の自筆譜では最高音を示す音名記号「クル」が能が独自に考案した記号として存在する一方で、早歌と共通性を持つ「上」「下」、そして一部で仏教声明、講式を由来とする一部の胡麻(音符)記号がある。これらの中でとくに「上」「下」といった記号は、単に音高を上げ下げするという指示ではなく、早歌と同様に「重」という音域の重なり構造において、音域を一段階高めたり低めたりする、つまり音楽構造のあり方にかかわる指示記号であったことが明らかになった。(1)で前述した世阿弥の自筆譜の性質が、文字による動詞形の指示の多用にあることが明らかになったことを受けて、旋律に関わる問題として音域の記し方が明確になった。

雑誌論文：「世阿弥自筆譜における胡麻への早歌からの影響」昭和音楽大学研究紀要41号、pp. 49-60、2022年。

学会発表：「《松浦》以降の世阿弥自筆譜における旋律記号の早歌からの摂取」東洋音楽学会第71回全国大会、2020年。

#### (3) 鳴り響きの解明としての早歌の旋律法からの影響

本研究での仮説は、謡が大人数への伝達性に優れた旋律を考案したとのものであるが、その仮説の実証のためには、謡の先行芸能の旋律の特徴と、謡自体の旋律の特徴を抽出する必要がある。

まずは先行芸能であるとともに楽譜上も謡の影響関係にある早歌の旋律の特徴を楽譜から探った。これまで早歌の旋律はおもに音階と音と音の連結法という観点からのみ研究されてきた。このため新たに早歌には七五調の歌詞の1句単位での旋律法の観点から旋律の動き方のパターンを謡と比較しつつ調査した。早歌では、謡と同様に七五調の上ノ句で高音域、下ノ句で低音域というパターンが多くみられるものの、より多様な旋律の動き方が存在することが判明した。

一方、能の旋律パターンは、上ノ句が高音域・下ノ句が低音域の旋律パターンでほとんど統一されていた。早歌での早歌は室内などでの少人数で楽しめる歌謡的要素が強く、多様な旋律で聞き手を楽しませるのに対し、大人数への伝達性を第一とする謡では、早歌の旋律とは異なり、より限定された旋律パターンを用いる傾向があることが明らかになった。このことから早歌の旋律法を、単純化し、パターン化したのが謡ではないかとの見通しを得た。

さらにこの結果を詳しく検討するために、世阿弥の自筆譜《江口》の「早歌節」との注記のある箇所音楽的特徴を探った。この部分は早歌の《対揚》の歌詞および音楽形式を引用したと考えられる。江戸期以降の謡本での該当部分は小段、一セイと記され、現在では《江口》の同部分は早歌の痕跡すらないほど謡としての様式化が進み、無拍節になっているが、世阿弥の自筆譜では元曲である早歌の《対揚》のように規則的な拍節に乗せていた可能性が高いことを音楽記号の解釈により指摘した。より詳しい旋律の様相については、世阿弥の自筆譜でははっきりとわからないものの、まだ一セイと記されるようになる以前の過渡的な段階にあると考えられる室町末期の謡本において、早歌での装飾音を多用するという基本的な特徴を模倣しながらも、典型的な謡の旋律パターンを採用していた。歌詞がより聞き取りやすい旋律への明確な指向性があったのではないだろうか。

雑誌論文：「能の旋律のパターンの由来と早歌」日本伝統音楽研究 28 号、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2021 年。

学会発表：「謡の旋律パターンと早歌の旋律パターン」音曲技法書（伝書）の総合的研究会、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2019 年。

「世阿弥自筆譜《江口》「サウカフシ」への早歌真曲抄《対揚》の影響」東洋音楽学会第 72 回全国大会、2021 年。

#### （４）謡の旋律パターンの他種目との比較

本研究はコロナ禍のさなかに行われたため、とくに早歌の楽譜資料の入手に難航し、謡と早歌と比較する研究を進めることがこれ以上、困難になった。このため当初の研究をより広く、日本音楽の旋律法全般へと広げることとした。他分野の実演家の協力を得て、地歌・箏曲、長唄、声明の講式などと謡の旋律法の比較を試みた。

上記（１）～（３）の研究により、謡の旋律の原則として、歌詞の上ノ句と下ノ句という詩型との関連でパターン化されていることを指摘した。その旋律パターンは上ノ句の旋律は上行型ないしは高音域であるのに対し、下ノ句の旋律は下行型ないしは低音域というものである。さらに近世に発達した歌舞伎・浄瑠璃などの劇場音楽では、謡の基本の旋律パターンをもとにしたヴァリエーションを作り出したとの説明が可能であると考えた。歌詞の詩型との関係で旋律パターンを考えることは、日本音楽の声楽を考えるためのひとつの見方を提示した意義があると考えられる。

学会発表："Melody ingenuity to convey the story in Noh Theatre", European Association for Japanese Studies (EAJS), 2019 年。

著書：『日本音楽うた理論』カワイ出版、2021 年。

#### （４）能の復曲活動へのアウトリーチ活動

本研究のアウトリーチ活動として、また研究の過程で得た知見を検証する目的で、能の復曲活動に参加・協力した。能には作曲されたあと演じられなくなり、廃曲となった番外曲が 2000 曲以上あると言われている。そういった曲を室町末期から江戸期の謡本（楽譜）をもとに、現在の記譜法に直して上演するのが復曲である。観世流能楽師の復曲活動のうち、謡の節付け面に参加し、研究成果の応用を試みた。

江戸初期の石田少左衛門盛直節付本を元に復曲した《虎送》、江戸中期の林和泉掾刊五番綴謡本版からの《和田酒盛》、室町末期から江戸期の各種謡本をもとにした《不逢森》、同じく江戸中期林和泉掾版からの《大磯》というように室町末期から江戸中期までの観世流謡本を復元した。

まず（１）での成果であるリズム記号である世阿弥の時代の「振り」の用法が室町末期以降、江戸期に至るまで用いられる例が散見することがわかった。このため現在とは異なった箇所にある場合に、世阿弥・禅竹自筆譜の用法によって処理を試みた。現在では振りという記号は旋律記号としてのみ機能しているため、リズム記号とみなすことで古い謡本での使用法を活かすことができたと考える。また本研究の中心的仮説である謡の七五調の一句と旋律とに連動性があり、上ノ句と下ノ句での旋律の動き方には厳密な規則性があるという原則を集中的に当てはめ、その旋律パターンによって謡の胡麻（音節や音価を明示する基礎となる音符）を解釈するという試みを行った。この結果、能楽創生期に確立したこれら謡の旋律的特徴は、多くは江戸期に至るまで基本的には通じるということが明らかになった。また世阿弥の自筆譜で用いられ、現在には廃絶するか、意味が変化した音楽記号の一部が江戸期まで継続して用いられていたことも判明した。

雑誌論文：「能楽《不逢森》の節付け面での復曲」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要 20 号、2023 年印刷中。

#### 結論

創生期の能楽は、それまでに類例のない広い劇場での劇場芸術として発達し、大人数の観客に確実に物語を伝達できる声楽を作り出した。その具体的な旋律的手法とは、七五調の上ノ句と下ノ句によって旋律の動き方を変え、日本語の自然な抑揚を写した旋律パターンにあったと考えられる。そのような旋律パターンは、能がゼロから編み出したわけではなく、先行芸能である早歌からの影響が大きい。早歌の歌謡的な多彩な旋律のなかから、文章の伝達性の高い旋律を意図的に選び取り、パターン化したものと考えられる。そのような早歌からの影響は、世阿弥の自筆譜からも記号の継承関係、および音域の記し方と言った音楽構造の概念の共通性からも指摘できる。

能楽が誕生し、室内での限られた観客への演奏から広い劇場での多くの観客層へと向けた芸へと昇華される際には、ある種の旋律の一律なパターン化、単純化が行われることで、旋律は的確な物語の伝達手段として機能したのである。かくして創生期の能の音楽は新しい語りの空間を開いた。

さらに本研究では、能楽で確立した旋律パターンを起点にして他の芸能と比較する手法を試みた。能以降の歌舞伎などの劇場音楽においては、より複雑な変化に富んだパターンへと発展していったと考えられる。

最後に、今後の研究課題として、世阿弥の自筆譜の解読のうち、部分的な記号や音楽構造のあり方については明らかになったものの、細かな旋律に関しては残る部分が多い。また早歌譜の入手に困難が生じたため、一部で研究の方向性を修正した。コロナ禍の終息を待って、着手できなかった部分を埋めたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 丹羽幸江	4. 巻 18号
2. 論文標題 能の旋律のパターンの由来と早歌	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 1,9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丹羽幸江	4. 巻 41号
2. 論文標題 世阿弥自筆譜における胡麻への早歌からの影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 昭和音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 49,60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丹羽幸江	4. 巻 18号
2. 論文標題 能の旋律のパターンの由来と早歌	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丹羽幸江	4. 巻 38号
2. 論文標題 世阿弥・禅竹自筆譜への早歌譜の影響ーリズム記号「振り」の摂取	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 昭和音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 76-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 丹羽幸江
2. 発表標題 世阿弥自筆譜《江口》「サウカフシ」への早歌真曲抄《対揚》の影響
3. 学会等名 東洋音楽学会第72回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 丹羽幸江
2. 発表標題 《松浦》以降の世阿弥自筆譜における旋律記号の早歌からの撰取
3. 学会等名 東洋音楽学会第71回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丹羽幸江
2. 発表標題 Melody ingenuity to convey the story in Noh Theatre
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (EAJS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹羽幸江
2. 発表標題 能《真田》の復曲過程
3. 学会等名 京都市立芸術大学公開講座、(社)東洋音楽学会、共催(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹羽幸江
2. 発表標題 「金春禅竹の記譜法」
3. 学会等名 東洋音楽学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹羽幸江
2. 発表標題 謡の旋律パターンと早歌の旋律パターン
3. 学会等名 音曲技法書（伝書）の総合的研究研究会、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 丹羽幸江	4. 発行年 2021年
2. 出版社 カワイ出版	5. 総ページ数 91
3. 書名 日本音楽うた理論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関